

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）において、言語・コミュニケーションは中核的な問題として関心は高く、様々な基礎的研究が蓄積されている。しかしながら、音声言語において重要な要素の一つである、プロソディに焦点を当てた研究は十分に行われていない。ASD 児の発話におけるプロソディについて、「独特な特徴がある」ということは古くから知られているものの、あくまでも経験的な報告に留まっていた。近年、英語圏を中心に ASD 児のプロソディの独特さについて様々な手法で検討がなされているが、具体的にプロソディのどのような部分に起因しているのかは不明確であり、方法論的な問題も指摘されていた。さらに、日本においては ASD 児のプロソディに対する研究自体が希少であり、日本語に応じた検討を行う必要があった。以上のような ASD 児のプロソディ研究の課題に対して、本研究では言語学的枠組みを利用して、ASD 児のプロソディの独特さについて検討した。本研究は、従来とは異なる新たな視点から ASD 児のプロソディの特徴を論理的に記述することを試みた点で、教育心理学や特別支援教育における先駆的な意義を有している。また、ASD 児のプロソディに焦点を当てた基礎的研究として、教育心理学、発達心理学、認知心理学、特別支援教育など他分野に渡り重要な示唆を与えるものである。将来的には、ASD 児の言語コミュニケーションに対して新たな支援方法の検討に繋がる研究と言える。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究では、ASD 児の指導に携わる現場の教員が、ASD 児のプロソディの特徴についてどのような認識を持っているのか、実態を把握するために調査研究を実施した。対象は、都内通級指導教室に在職する教員であり、個人情報保護および研究倫理規定などを踏まえながら、質問紙調査とデータの整理・分析・考察がなされている。また、ASD 児の発話におけるプロソディの特徴を記述し、定量的差異を検討することを目的として実験研究が展開された。対象は、ASD 児および定型発達児であり、個人情報保護及び研究倫理規定などを踏まえながら、会話場面および課題場面の音声を収録し、データの整理・分析・考察を行った。さらに収録した音声について、実際の聴覚印象について併せて検討することを目的として、第三者からの聴覚印象評定実験を実施した。以上のように本研究は、教育心理学や特別支援教育の基礎的研究において、十分な水準にあり、該当研究分野において妥当性が高く評価される。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、個人情報保護・研倫理規定を踏まえた調査・実験の計画と実施、データの収集・統計的手法による分析、および結果の公表と社会還元が不可欠であるが、それらは適切になされている。また、実験研究において収録した ASD 児および定型発達児の音声は、対象者の選定、録音環境や収録方法、課題における発話内容等を、適切に統制した上で収録されており、貴重なデータを収集したと言える。さらに、音声の書き起こしやラベリング作業、イントネーションの分析等は、韻律音声学における手法に基づいて実施し、ASD 児のプロソディについて

詳細かつ多角的な分析を適切に行ったことが認められる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、ASD 児の発話におけるプロソディの違和感や不自然さは、語彙や文型などで規定されるレベルよりも、語用や談話レベルの問題であり、文脈や場面に応じたプロソディの使用の不適切さに起因している可能性があると考えた。また、全ての ASD 児に共通する ASD 固有の特徴は示唆されず、顕在化するプロソディの特徴には個人差が大きいことが示唆された。今後、プロソディの特徴と個々の ASD 児の特性との関連性について多様な側面から検討することで、個々の ASD 児に対する更なる理解が得られると考えた。以上の考察は、客観的な手続き、分析方法に基づいて導き出されたものであり、論理的にも妥当である。さらに本研究結果は、今後、教育心理学、特別支援教育の研究などの様々な分野で運用されることが期待され、十分な学術的水準に達していると評価される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

これまで ASD 児の言語コミュニケーションに対する支援や指導において、プロソディに焦点が当てられることは少なく、そもそも基礎的研究が十分では無いことが現状であった。本研究では、これまで理解が進んでいなかった ASD 児の発話におけるプロソディの違和感や独特さについて、言語学的枠組みを用いて理論的に解釈可能な形で記述し、プロソディを構成する各要素の問題として整理して検討した。その結果、これまで漠然とした印象であった ASD 児のプロソディについて、個々のプロソディの特徴を具体的に捉えることが可能であることが示唆された。さらに、ASD 児のプロソディの問題について、教育者や支援者など、ASD 児と関わる聞き手側に対する示唆も得られた。これらの研究成果は、ASD 児の言語コミュニケーションに対する理解、さらには支援への発展に寄与するものとして、学問的意義が高いと認められる。加えて、本申請者は研究成果の一部を国際学会 (the 14th annual International Meeting for Autism Research, 2015; Experimental and Theoretical Advances in Prosody 3, 2015) において発表を行い、ASD 児のプロソディの特徴についての分析的結果を発表したことは特筆すべき事項である。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士 (教育学) 学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。